

人権協シンボルマーク



いろんな人と人のつながり、
ふれあいを美浜のMと波で
イメージしました。

ふれあい

美浜町人権尊重啓発協議会会報

第72号

発行：令和2年11月20日
(年3回発行)

編集：人権協広報部会

連絡先：美浜町教育委員会事務局

TEL 32-6708

FAX 32-9032

E-mail: jinkenkyo@town.fukui-mihama.lg.jp



↑アドレスの入力を
省略できます

今号は、残念ながら中止となった町民人権講座に来ていただく予定だった
講師の方の寄稿文を掲載いたします！

第3回町民人権講座

性的マイノリティってなに？

～楽しく学ぶ、ジェンダー、セクシュアリティ～

仲岡 しゅん さん

弁護士（うるわ総合法律事務所）

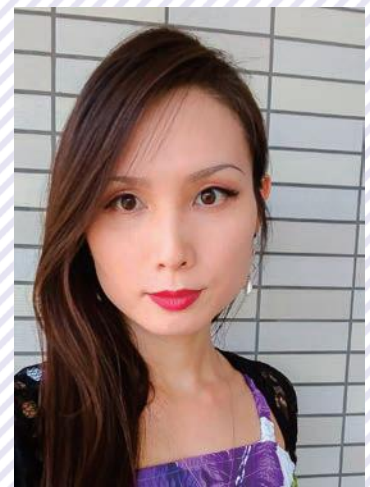
Profile

大阪弁護士会に所属する弁護士。

男性として生まれたが、現在、女性弁護士として弁護士登録し業務をおこなう。

大阪の西天満で「うるわ総合法律事務所」を開設し、弁護士4名で民事、家事、刑事など幅広い分野を扱う。

LGBTなどをはじめ、ジェンダー、セクシュアリティに関する相談や問題にも多く対応する。



みなさま、ごきげんよう。

弁護士の仲岡しゅんと申します。大阪の「うるわ総合法律事務所」で、女性弁護士4名で仕事をしています。その中でも私は少し珍しい弁護士で、男性として生まれた女性弁護士、いわゆる「トランスジェンダー」や「性同一性障害」と言われる当事者の一人でもあります。テレビのワイドショーにも毎週出ておりますので、もしかしたらご存じの方もいらっしゃるかもしれません。

今年、美浜町のみなさんに、性の多様性についてお話する予定だったのですが、新型コロナウイルスの影響で、残念ながら中止になってしまいました。そこで、この場を借りて、概要だけ少しお伝えしようと思います。

＊

さきほど、自己紹介の際に、「トランスジェンダー」という言葉が出てきましたが、聞いたことがあるでしょうか。私のように、男性として生ま

れたけれど、女性として生きている人、あるいは逆に、女性として生まれたけれど、男性として生きている人のことを、「トランスジェンダー」といいます。また、トランスジェンダーの人の中には、ホルモン治療や性別適合手術などの医療的措置を求め、「性同一性障害」という診断をもらう人もいます。

もしかしたら、みなさんの中には、「男性として生まれたのに、なんでそんなことを？」と思った方もいるかもしれません。ですが、この社会には、私だけでなく、一定数、このような人は存在しています。

私の場合、大学を卒業するくらいの頃までは、男子学生として生活してきました。当時は髭が生えていましたが、今ではこんな姿になっています。では、いつからこんなふうになったのか、その変遷を少しお話ししましょう。

まず、私は、「男の子」だった幼い頃から、「男

はこう生きなきゃいけない」という強い思い込みを持って生きてきました。男たるもの、男として生き、女性と結婚し、家庭を持ち、生きていく、それが踏み外してはいけない道だと、思いこまされていたのです。ですが、思春期になった頃から、それが自分に合わない道だと気づきます。

思春期の頃、周囲の男子生徒たちは、女性を恋愛対象として見ている子がほとんどでした。その中で、私は女性を恋愛対象として見る事が出来ず、そして年齢を重ねにつれ「大人の男」に成長していく自分の体や姿に羞恥心と恐怖感を覚えていました。しかし、当時の私には、それを表現する言葉や概念がありませんでした。私が子どもの頃、トランスジェンダーや性同一性障害といった言葉は、今のように日本ではあまり知られておらず、むしろテレビなどのマスメディアを通じて流れてくるのは、そういった人たちをバカにするような言葉がほとんどでした。その中で、私は本当の自分を押し殺しながら生きるしかなかったのです。

そんな私に転機があったのは、20歳を過ぎ、大学を卒業した後のことでした。たまたま開催された地域の行事で、トランスジェンダーの人々が集まる機会があったのですが、そこで他の当事者との出会いによって、トランスジェンダーというものを知りました。そのとき初めて、私は「本当の自分」にじっくりくるあり方、自己肯定できる概念に出会ったのです。それから、私は少しずつ、男子学生の「仲岡くん」から、女性弁護士の「しゅんちゃん」へと変貌を遂げていくのでした。

字面で書くと、短いものですが、その過程の中では色々な葛藤がありました。学校のこと、仕事のこと、社会の中での差別や偏見のこと。そういったお話を、来年に延期になった講演会では詳しくお話ししたいと思います。

＊

ところで、私のように、性別を移行していく人、つまりトランスジェンダー以外にも、性のあり方は様々です。

近年は、テレビや新聞などで、「LGBT」という言葉を聞く機会が多くなりました。ご存じの方はもう十分ご存じでしょうけれど、そうでない方

は、これを機会に知っていただけたらと思います。

LGBTというのは、レズビアン（女性同性愛者）の「L」、ゲイ（男性同性愛者）の「G」、バイセクシュアル（両性愛者）の「B」、トランスジェンダー（性別越境者）の「T」の4つの言葉の頭文字を繋げたものですが、これは人間の性のあり方が多様であることを表しています。

このうち、最後の「T」は、先ほどお話ししたトランスジェンダーですが、「L」「G」「B」は、男女どちらを（あるいは両方を）好きになるかという点に着目した言葉です。もしかしたら、みなさんの中には、男性は女性を好きになるのが当たり前、女性は男性を好きになるのが当然、そのように思い込んでいる方がいるかもしれません。しかし、実際には、女性を好きになる女性もいれば、男性を好きになる男性もいて、あるいは男女にかかわらず恋愛対象という人もいるのです。

そしてこういった愛の形は、いずれも決しておかしなことでも、間違っただけのものでもありません。人がお互いを尊重し、愛し合うことに、良いも悪いもありませんし、優劣もありません。そこに男女という組み合わせが絶対に必要なわけでもありません。そこに幸せがあるのなら、それ以上に美しいことはないのではないのでしょうか。逆に、自分に合わない愛の形や「こうあるべき」という枠組みを押し付けられて生きることに、いったい何の幸せがあらましようか。

＊

今回は、来年に延期になった講演の予告編ということで、もっと詳しい性にまつわる色々なエピソードは、講演本番まで取っておこうと思います。来年、みなさんとお会いできるのを楽しみにしています。



第2回町民人権講座

指をさす社会から
手をにぎる社会へ

三木 幸美 さん

とよなか国際交流協会 職員

Profile

1991年大阪出身。フィリピンと日本のハーフとして大阪の被差別部落で生まれ、無戸籍・無登録児から8歳で「日本人」となる。大学生の頃からルーツをもつ子ども・若者と関わりはじめ、子ども～社会人までを対象にしたダンス教室を開講。「切り取らせない」言葉を発信することにこだわりをもち、講談社現代ビジネスでの執筆や講演、ダンスワークショップなど多方面で発信を続けている。



2020年を迎えたとき、社会から「当たり前」の日常がなくなることを、どれだけの人が想像したでしょうか。もう当たり前の社会には戻れないかもしれないと思い始めてる今、私達はどんな2021年を想像するでしょうか。

*

私が最初に新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の発生をニュースで見たとき、はじめに危惧したことは「社会的マイノリティへの眼差し」でした。

普段から仕事で外国人と接する機会が多い私は、外国人や外国にルーツを持つ子どもたちが指を差される場面をいくつか知っています。自分と誰かの間に線が引かれ、地面がひび割れていくようなできごとが起こるんじゃないかという予想は、私が思っていた以上に早く現実となってしまった気がします。



「大丈夫か? みんな嫌なこと言われてないか?」

新型コロナウイルスの感染拡大により学校が休校になり、緊急事態宣言が発令された頃、国際電話特有のノイズに混じって母が私に尋ねました。私は、「いまのところは大丈夫」と答えながら、母がそう尋ねた理由を考えていました。

*

母は、フィリピンの田舎町で8人兄弟の4番目に生まれ、20歳で日本にやってきました。

8人兄弟全員が海外で出稼ぎ労働者として海外へ移住し、パートナーと出会い、そこで新しい家族を形成しながら暮らしています。

私の母は日本で20年あまりを暮らすなかで、自分が日本社会の中でマイノリティとして暮らすとき、周りからどのように指を差されるのかをよく知っていました。

小学生の頃、母と駅のホームで電車を待っていたとき、たまたま居合わせた見知らぬおじさんに、「あんたナニ人? 仕事は? へえ、結婚はしてないの? いつから日本におんの?」とにやにやした顔で話しかけられたことがあります。小学生ながら、そのねっとりとした質問が無礼であり、不快であるという確信をもちました。それでも母は最後まで笑顔で答え、そばにいた私にも嫌な顔ひとつ見せませんでした。

*

当時、在留資格を持っていなかった母にとって一番大切だったのは、父と私との当たり前の日々



でした。胎児のうちに認知をもらっていなかったことで、一緒に暮らす私達3人は法律上赤の他人であり、存在しない家族としての日々を送っていました。

働きに出たいと電話をかけた先で、「ああ、外国人は雇ってないんで」とガチャンと電話を切られることも、娘の同級生に「わあ、ガイジンや!」と指を差されながら笑われることも、家族の当たり前の日々と引き換えに母の負った傷や感情はより見えないものになっていったのだと知ったのは、もっともっと後になってからでした。

*

そして子どもだった私は、おとなになるにつれ、マイノリティを表すことばはとても便利だと思うようになります。

「やっぱりハーフやから背が高いのね」「部落の人なのに怖くないね」「外国人なのに礼儀正しいね」……一見褒めているつもりの言葉に隠れるのは「〇〇だろう」という断定的思考とマイノリティとマジョリティの非対称性だと気が付きはじめました。

ひっくり返すと「ハーフなのに外国語しゃべれないんだね」「やっぱり部落の人やから怖いわ」「外国人だからこの人たちにはわからないんだよ」というように、使い手によってポジティブにもネガティブにも捉えられるその言葉の舵取りは、常にマジョリティによって行われてきました。

*

そして社会が未知への不安を抱くとき、うっすらと蔓延した差別意識ははっきりと目に見える形で現れます。不安を打ち消したい一心で向けられ

る刃の矛先は、決まっていつも「より弱いもの」であり、それは過去の歴史から見ても明白なはずです。そこに善意/悪意は関係なく、ただひたすらに困難に立ち向かう人々が、社会的マイノリティをより孤立させ、「助けて」という言葉すらも奪っていくのです。

*

外国人であることで入ることのできない飲食店、ネット上での感染者の特定や家族への執拗な攻撃、医療従事者への不平等な扱い、それは世界中で同時多発的に起きはじめました。



私が住む大阪でも、道を歩いているときに飛び交う会話のなかに、特定の国を指しながら「〇〇人がウイルス持ち込んだんや、日本人にとったらええ迷惑や」と悪態をつく言葉が耳をかすめます。移動中の電車の中釣り広告に「知られざる〇〇(国名)」「〇〇(地名)ウイルス」という言葉が並んでいます。

日常生活で不意に不安を煽る言葉に触れたとき、言葉のつづきを知りたくなくて、足早に移動しながらイヤフォンをつけるようになりました。社会から自分を遮断するように、イヤフォンのノイズキャンセル機能をオンにすることが、私にできる唯一の意思表示でした。

*

日常生活のさまざまな場面において「NO」というメッセージを突きつけられること。

突きつけられる側にとって、それはゆくゆく生きることに対しての「NO」なんだと感じはじめます。



誰かに対して「必要ない」「出ていけ」という態度を見せることは、指を差す側に回る行為であり、社会の多数派に自分が含まれているという一時的な安心をもたらしてくれます。しかしその指が自分にも向く可能性を想像できている人はそう多くはないはずです。私自身、このコロナ禍で不安を感じないわけではありません。しかし自分の不安と引き換えに、この社会に暮らす誰かを生贄に

することはしたくないと思いつけてきました。

＊

人間の態度というのは、人から人へ感染していきます。恐れるべきはウイルスのはずなのに、人々が不安や憎悪に伝染し、マイノリティに対する空虚な差別心がこの社会でぶよぶよと膨らんでいくのをはっきりと感じ取ることができます。

世界中に散らばる私の家族は、時折SNSを通して近況を報告し合うなかで、それぞれがその社会のマイノリティとして指差され、不当に扱われることを嘆いていました。

海外移住者にとって、移動の不自由というのはとても大きな問題です。雇い止めになっても仕事を変えることができない、本国への帰国・送金もできず、離れて暮らす家族にも会えない。



それはここ日本においても、同じことがいえます。アルバイトのシフトを減らされ収入が激減したり、在留資格に関する手続きが1日遅れたために給付金の対象から外れたり、非正規雇用のため感染リスクが高まる中でも出勤しなければならない状況が至るところで起こりました。しかしそれらはすべて自己責任とされ、社会構造の問題だと声を上げる人はごくわずかです。

このコロナ禍において、私達が抱える困難や不自由はさまざまだといえます。今の社会を覆う自己責任論は、それぞれの痛みや不自由を打ち消してくれるものではなく、むしろ個人を社会からさらに孤立させるものになってしまったといえます。ここから私達ができることは、「多様な人がいて、それぞれに一生懸命生きている」ことを知ること、そして「それでも私達は他者とつながる可能性を持ち合わせている」と、この社会を信頼して生きることではないでしょうか。

いうまでもなく、新型コロナウイルス(COVID-19)によって私たちの生活は大きく変わりました。

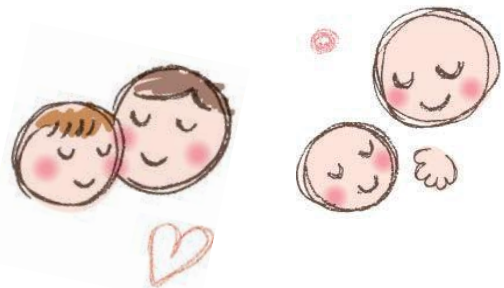
しかしそれはきっと、コロナによって私たちが「変えられる」社会から、私達が意志を持ってこの社会を「換える」時期に来ているのだろうと思います。

＊

この転換期のなか、痛みを伴う誰かを指差すのではなく、この社会から零れ落ちそうになる人に対して、その人の手をぐっと握る社会でありたいと思います。

＊

私達はどんな風に2021年を迎えるでしょうか。この社会をより良く換えていくために必要なことは何でしょうか。この文章を読んでもくださる皆さまと、また来年一緒に考えられることを楽しみにしております。



いかがでしたか？ お二方とも町民人権講座2021で美浜に来ていただく予定です。ご期待ください！



「ふれあい」第71号をお読みにになった読者の方より、多数のおたよりが寄せられました。ありがとうございます。紙面の都合上、その中のいくつかを紹介いたします。これからもみなさんの「声」をお届けいただけると幸いです。

◆新型コロナウイルス感染症の広がりにより、地域の人々との活動やイベントが減ってさみしいです。以前のように、皆で集まって活動したり、イベントを楽しめたりする日が来るように一人一人が気を付けたいものですね。みなさん、頑張って一緒に乗り越えましょう！(N.Tさん)

◆テレビをつけると「コロナ、コロナ…」もしも感染してしまったら…という不安から、気が付けば自分にも差別・偏見が生まれていました。他人事だと思っていた差別や偏見を身近に感じ、真剣に考えさせられた数か月です。直接ふれあえなくても、心のふれあいを大切に、皆で乗り越えていきたいですね。(T.Yさん)

◆人権まんがは、手に取りやすく、読みすすめやすく、何より若者に読んでもらうには、とても良いものだと思います。今回紹介されていた4つは、知らないマンガばかりだったので、私も読んでみようと思いました。世の中には人権問題に触れるマンガが多く、とても勉強になります。少し前には「リアル」(車いすバスケットを題材にしたマンガ)に、はまってしまいました。(I.Yさん)

5x7 grid crossword puzzle with numbers 1-17 and some cells shaded black or yellow.

応募方法 (郵送、FAX、E-mailいずれかをお願いします)

●答え・住所・氏名を巻末の用紙に書いて下記までお送り下さい。〒919-1192 美浜町郷市25-25 人権協事務局(教育委員会事務局内) ※FAX(0770-32-9032) E-mail(jinkenkyo@town.fukui-mihama.lg.jp)

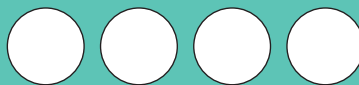


- 〆切は、令和3年1月15日(金)です。(当日消印有効)
●正解者の中から抽選で、図書カードをお送りします。
●前号の人権クロスワードの正解は「エール」でした。
たくさんご応募、ありがとうございました。正解者は13名でした。
今回の当選者は 中村 新一さん 玄 あずささん 沼田 知佳さん

高濱 清美さん 今井 悠介さん

以上の皆さんです。おめでとうございます！

人権クロスワードパズル 黄色のわくの中の文字を使ってできる言葉が答えです。



タテのカギ

- 1. 財務省の外局で、国の税金を賦課・徴収する仕事をしています。
6. 北極点に立つと、どの方向もこれです。
7. 両親の両親のうち男の方。
9. 戦争を表す言葉。文永の〇〇、弘安の〇〇など。
10. 具とご飯にスープをかけた朝鮮料理のこと。
11. 注意深く心を働かせて考えること。
12. 元素記号Cuの金属で、燃えた時の炎の色は青緑色です。
14. 「灰汁」と書く、肉などを煮た時に、煮汁の表面に浮き出る白く濁ったもの。
15. 太陽の出る方向です。
17. ひき肉などを玉菜の葉で俵型に巻いて煮込んだ料理のこと。

ヨコのカギ

- 1. IC、JCT、SAから連想されるもの。
2. 演習や講習会のこと。〇〇ナル。
3. 油揚げの中に酢飯を詰めた食べ物。
4. 山林の気から生じる妖怪のこと。川の妖怪と合わせて〇〇魍魎とも言います。
5. 込み入った事情であれこれ変わる。
8. 人権を考える上で、しばしば問われるもの。辞書には「特に変わっていないこと」「ごくありふれたものであること」とあります。
9. 『ヨコ1』のカギにあるSAの「A」です。
13. 切手を貼って送る通信用の紙のこと。
15. 朝と夕方の間。
16. 物が見える範囲のこと。

編集後記

◆社会志向、個人志向という言葉をご存知でしょうか。内閣府による世論調査で興味深いデータを見つけました。調査では、社会志向を「国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」と聞き、個人志向を「個人の生活の充実をもっと重視すべきだ」と聞いています。◆このデータ、平成23年には社会志向56%、個人志向が32%でその差が24%だったのに対し、令和2年1月には、社会志向45%、個人志向41%とその差が4%まで拮抗してきており、この傾向はここ三年間続いています。◆みなさんはこの社会志向が減り、個人志向が増えている傾向をどう捉えられるでしょうか？一つ考えられることは、ネットでなんでも情報を得たり、コミュニケーションをとったりするようになったことも

大きいと思います。また、地域や職場、学校においても、縦や横のつながりが希薄になってきていることも影響しているのではないのでしょうか。◆最新のデータが今年の一月のものですから、コロナ禍の中おそらく逆転しているのではないかと危惧を覚えます。みんなの幸せを願うことよりも自分の幸せを願うと置き換えるとそこには殺伐とした情景しか思い浮かびません。◆ある小学校の体育大会のテーマは「感謝」でした。よく使う言葉ですが、今は医療関係、公共機関、物流、販売など最前線で働くみなさんへの感謝が思い浮かびます。◆決して個人志向ばかりに走ることなく、心と心のふれあいが一つでも多くなり、差別・中傷することなく、みんなの幸せを願う社会でありますように。

(西)

山折り

切り取る

のりしろ②

919-1190

料金受取人払郵便

敬賀局
承認

2075

差出有効期間
令和3年1月
15日まで
(切手不要)

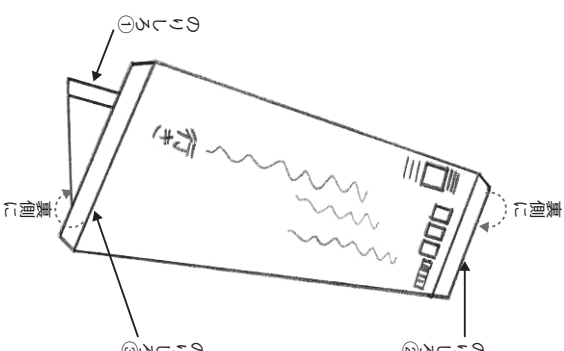
美浜町教育委員会事務局内
美浜町人権尊重啓発協議会 行き

福井県三方郡美浜町郷市二五―二五

山折り

のりしろ①
山折り

この用紙の使い方
宛先が図のように
なるように三つ折
にして、のりしろの
①②③どうしを貼
りあわせる。



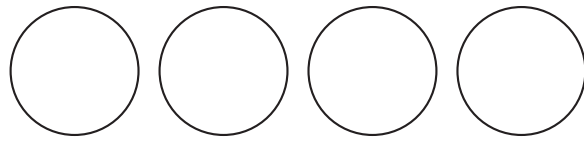
のりしろ③

山折り

切り取る



★人権クロスワードの答え★



★アンケート★

今回の「ふれあい」第72号を読まれて、ためになった、よかったと思われた記事はどこですか？

次の中から該当するものに○印をつけてください！（複数回答可）

1. 仲岡しゅんさん 記事
2. 三木幸美さん 記事
3. 「こえ・声・こえ」
4. 人権クロスワード
5. 編集後記

★感想・その他★

「ふれあい」や人権協の活動についての感想・ご意見・ご要望を書いてください！

ご住所（番地までお書き下さい。）

お名前